様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６５８

研究課題名（和文）日本人アウトライアー英語使用者のインタビュー研究

研究課題名（英文）An interview study of outlier users of English in Japan

研究代表者
片山　晶子（Katayama, Akiko）

東京大学・教養学部・特任講師

研究者番号：１０６２２８０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では大規模社会調査データが示した日本人の非典型英語使用者（高卒・地方在住・ホワイトカラーでない・高所得でないが英語を日常的に使用している）男性２名女性２名を、2年間1人３回にわたって長時間録音インタビューをし、生活・職業の中での英語使用、教育歴、将来の展望・英語や英語教育への意見を自由に物語ってもらった。研究参加者の自分語り（ナラティブ）は全て書き起こしテーマ分析を行った。分析は主としてフーコーの言説理論に導かれた。研究参加者の物語には、英語運用能力が社会的成功に結びつかない経験と、複数の、時に相対立する言説（言語によって表され再生産され、それを言うものを縛る考え・慣行）がみとめられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は前の研究（典型的英語使用者のナラティブ）と合わせて最終的な成果物とする予定なので現在の研究成果は部分的なものである。
　現段階での研究成果として重要なものは、2016年4月から2019年3月の3年間に合わせて5回行った国際学会での発表である（詳細後述）。具体的にはデータに見られたGlobalization言説・在日米軍基地の町におけるアフリカ系米国人ファッション等の影響を受けた「B系言説」・「英語は女性を救う」言説などについて論じた。また旅館で英語が母語でないアジアからの泊まり客に英語で接客をする女将のナラティブに現れた英語習得と英語使用をアフォーダンスの理論を使って考察した。

研究成果の概要（英文）：　The present study audio-interviewed two female and two male participants who were, according to the previous large scale social survey, outlier English users in Japan; namely, high-school-graduate, non-urban-resident, non-white-collar, and non-high-income speakers of English in Japan. In two years, three long interviews were conducted with each of the four about their use of English in life and work, their history of education, future plan, as well as their views about English and English education. The narratives were fully transcribed and thematized. The analysis was guided by Foucault's theory of discourse (values and practices produced and reproduced by language, which binds those who speak of such values and practices).
　The participants' long narratives reflected the outlier English speakers' realities of proficiency NOT necessarily leading to success. In addition, multiple, often conflicting, discourses about English and related ideas were evident in the stories.

研究分野：社会言語学

キーワード：アウトライアー英語使用者　ナラティブ　言説　フーコー　社会言語学

１．研究開始当初の背景

日本の学校英語教育は「使える英語」を到達目標とする政策上の転換をし、少数の大企業での「英語化」が大きく報道されているが、このようなネオリベラリズムを背景にした「英語すなわち資本」という言説は一般国民の生活世界では往々にして拒絶され、「英語による授業」のようなトップダウンの政策は現場では殆ど実現していない。またこの教育政策のゴールであるはずの「英語を使って生きること」が、実際の日本人当事者にどのような意味があるのかは十分把握されているとは言えない。

そこで前の研究（H24 科研基盤Ｃ No. 12001418「日本人にとっての英語の資本性」）では、まずどのような日本人が英語使用者なのかを、大規模社会調査データベースからのプロファイリングで探った。英語を使っていると自己申告した日本人は全体の約１割、英語使用者の典型は女性３０代後半・男性４０代の高学歴・高所得世帯の都市在住者であった。前の研究ではこの典型使用者に当てはまる研究参加者を探して、彼らがどのように英語を習得し、どのように使用しているか、またそれが、（政策決定者ではなく）実際に英語を使って生きる当事者にとってどのような意味を持っているかを、インタビューで聞き取りをした（Katayama & Terasawa, 2015）。

この「日本人にとっての英語の資本性」の研究の統計調査部分では、少数ながら学歴・社会経済階層が比較的低く、都市在住ではない統計的アウトライアーの英語使用者の存在も確認された。経済的に恵まれ大都市で教育を十分に受けていても英語を実際に使用する日本人は稀にしかいない中で、学歴、社会経済階層があまり高くなくて、しかも都市部ではない地域に在住・就労しながら英語を使用して暮らしている人々が一体どのように英語を習得し使用しているのか、英語や英語を学ぶことについてどのような考えを持っているのかを探ることは、日本人の英語使用者をよりよく理解するために欠かせないと認識された。

２．研究の目的

本研究では、日本における統計的アウトライアーの英語使用者をエスノグラフィック・インタビューの手法で調査した。この研究でいうアウトライアーとは、大学教育を受けていない、ホワイトカラーの職業ではない、都市ではないところが生育・生活・仕事の場である、高所得者層ではない人で、日常英語を使うことがある人々をいう。当事者が、自らの来歴、経験、意識等を物語るデータ（ナラティブ）を分析することにより、前の研究である「典型的英語使用者」のデータと合わせ、日本人にとって母語ではない英語を習得し使用することの現実を深く理解することが目的であった。

「使える英語」を目的とする英語教育政策を成功させるためには、日本人が英語を使う現実の理解は欠かせない。現状を把握するための「巨大なスナップ写真」としての大規模統計と合わせ、実際に英語を使って暮らす日本人の「状況」と「歴史」を当事者が自ら語る「物語（ナラティブ）」として質的に深く分析理解することも重要である。すなわち時間とともに変化する個々の「状況」の中で起こる一般化不可能な外国語習得と外国語使用の有様を検証する質的研究（例, Atkinson, 2011; Block, 2003 ）は、日本の言語習得・言語使用の分野では前例が極めて少ない。本研究は、このような研究の隙間を埋め、もし日本が本当にもっと多くの英語使用者を必要としているのであれば、どのような政策が合理的なのかを考えるよすがになることを意図している。

３．研究の方法

背景の項で述べたように、本研究は典型英語使用者をインタビューした前の研究「日本人にとっての英語の資本性」と対をなすプロジェクトである。よって研究方法も前述の研究を踏襲している。研究協力者である非典型英語使用者（アウトライアー）は知己を通じて募った。結果、関東山間部、関西の郊外、離島の３箇所で合計５人（男性３人女性２人）をインタビューすることができた。うち関西の郊外の男性１名はパイロットとして前の研究の中でインタビューをしている。研究参加承諾に関しては第一回のデータを取る時に書面と口頭による説明を行い承諾書を交わし、最終回のインタビューで改めて承諾の条件と意志を確認した。

インタビューは 2016 年度と 2017 年度に、研究参加者が住んでいる、または働いている地域の研究参加者指定の場所で行われた。インタビューは半年程度の間隔を空け１人３回の行い、全て音声を録音した。但しパイロットとして行なった１名は、その後のインタビュー交渉が多忙を理由に不調に終わり、１回のみのインタビューとなってしまった。1 回のインタビューは 1 時間から 1 時間半、テーマは大まかに第 1 回:現在の生活と英語使用、第 2 回:英語習得の経緯、第 3 回:将来の計 画と英語習得・英語教育についての意見、と緩く設定し、自由に話をしてもらった。 録音データはすべて研究者自身が書き起こし、ナラティブ研究では一般的なテーマをコーディングしていく方法で分析した。データを収集しながら仮分析、部分的分析をし、本データを理解するにあたって最適な社会理論を模索していった。この結果は年間 2 回のペースで応用言語学および社会言語学の国際学会で発表し、同分野の研究者の批評批判を仰いだ。

４．研究成果

本研究は前の研究（典型的英語使用者のナラティブ）と合わせて、最終的な成果物とする予定なので、現在の研究成果は部分的なものである。

(1)フーコーの言説理論による分析

本研究は全体を通してはフランスのポストモダニズムの哲学者ミシェル･フーコーの言説理論に導かれた言説分析 Foucauldian discourse analysis (Wooffitt, 2005)を試みている。フーコーの言う「言説　(discourse)」とは、価値観・考え・(言語も含めた）社会慣行の総称であるが、人がそれについて語ることにより（実態とは別に）再生産されていき人間の集団的な行動や慣習・思考を縛っていくものである(Foucault, 1977)。ちなみに批判的応用言語学では同じくフーコーに影響を受けた研究者が「グローバリゼーション」や「国際語としての英語」もまた discourse である、としてその概念そのものや、概念に基づく言語教育政策等に批判的検討をしている（例, Pennycook,2007）.

(2)国際学会での発表：フーコー的言説分析

現段階での研究成果として重要なものは、2016 年 4 月から 2019 年 3 月の 3 年間に合わせて 5 回行った国際学会での発表である（詳細は次項参照)。1 件を除いて発表はこの研究で収集したデータの部分を上述の言説理論に導かれ分析したものである。具体的には Globalization 言説・在日米軍基地の町における英語をめぐる言説やアフリカ系アメリカ人のファッションや音楽の影響を色濃く受けた「B 系」の言説さらには、前の研究と本研究の女性参加者のデータに注目し「英語は女性を救う」言説についても論じた。

研究参加者のナラティブには複数の、時に相対立する言説が認められ、アウトライアー英語使用者を縛っている錯綜する価値観が顕著であった。また共通して学校教育や学校英語教育への強い不信感・無益感が随所に現れたこと、英語の価値を高く評価する一方で中国語など同様に役に立つであろう英語以外の言語に無関心である事、英語を職業で使うことにそれほど強い執着はないことにも注目した。

(3)国際学会での発表：ELF とアフォーダンス

国際学会で発表した部分研究のうちの 2017 年 3 月 AAAL (the American Association for Applied Linguistics) で発表した論文は、研究協力者のうちの１名のデータを上記とは若干異なった視点で分析をした。旅館で英語が母語でないアジアからの泊まり客に英語で接客をする女将のナラティブに現れた英語習得と英語使用を ELF（English as Lingua Franca、主として母語話者ではない英語使用者同士のコミュニケーションを指す）の観点から、アフォーダンスの理論を使って考察した。アフォーダンスとは、元はギブソンによる生態学の概念で、応用言語学言語習得では「環境が提供するものを有機的に生かす学び」(van Lier, 2000)という解釈で用いられている。女将が必ずしも英語を習得するためのリソースが豊かとは言えない環境で、ネットも含め使えるものを巧みに探し利用して、やはり英語が母語でないアジアからの泊まり客とのコミュニケーションを成立させている様子を報告した。

[引用文献]

Atkinson, D. (2011). Introduction: Cognitivism and second language acquisition. In D. Atkinson (Ed.), Alternative approaches to second language acquisition (pp. 1-23). New York: Routledge.

Block, D. (2003). The social turn in second language acquisition. Washington D. C.: Georgetown University Press.

Foucault, M. (1977). *The archaeology of knowledge and discourse on language* (A. M. Sheridan Smith, Trans.). New York: Pantheon.

Katayama, A. & Terasawa, T. (2015). Is English capital for the Japanese?: A mixed-method study of English users in Japan. The 2015 AAAL (the American Association for Applied Linguistics) Conference. Toronto, Canada.

Pennycook, A. (2007). The myth of English as an international language. In S. Makoni & A. Pennycook (Eds.), *Disinventing and reconstituting languages* (pp. 90-115). Clevedon, UK: Multilingual Matters.

van Lier, L. (2000). From input to affordance: Social-interactive learning from an ecological perspective. In J. Lantolf (Ed.), Sociocultural theory and second language learning (pp. 245-256). Oxford: Oxford University Press.

Wooffitt, R. (2005). Conversation analysis and discourse analysis: A comparative and critical introduction. London: Sage.

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　5　件）

1. Katayama, A. (2019). Discourse of “English saves women in Japan” still speaks: A narrative study of Japanese women NOT saved by English. The 2019 AAAL (the American Association for Applied Linguistics) Conference. Atlanta, Georgia, USA.
2. Katayama, A. (2018). US military base, English, and us: A Foucauldian discourse analysis of life story narratives by young Japanese outlier English users. 2nd International Conference on Sociolinguistics. Eötvös Loránd University, Budapest, Hungary.

3. Katayama, A. (2017). Affordances for ELF speaking Okami: A narrative study of a female hotel manager in Japan. The 2017 AAAL (the American Association for Applied Linguistics) Conference. Portland, Oregon, USA.
4. Katayama, A. (2017). Have-not English Users in Japan's Discourse of Globalization: A Narrative Study. Association Internationale de Linguisitque Appliquée (AILA) 2017 Conference. Rio De Janeiro, Brazil.
5. Katayama, A. (2016). A Narrative Study of Outlier English Speakers in Japan. The 3rd AILA East-Asia and 2016 ALAK-GETA Joint International Conference. Honam University, Gwangju, South Korea.

６．研究組織

(1)研究分担者　なし

(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。